

鹿児島大学 理学部通信

2010年
第4号

理学部通信第四号発行に寄せて

同窓会会長 川畑 隆

同窓会会員の皆様方には、御健勝で御活躍のことと心からお喜び申し上げます。

世界的経済不況の中、我が国の少子高齢化の波は急速に進み、また、地球規模で変わりつつある環境の変化が、人類の生活に日々悪い影響を与えつつあります。つい先日は、母校創立記念六十周年記念式典が稲盛会館にて盛大に実施され、「自主自律」と「進取の精神」を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する「進取の気風あふれる大学」を目指すという誓い合った一日となりました。我が理学部、そして、その同窓生は、鹿児島大学の源流に遡る藩学造士館の歴史に鑑みて、地域のリーダーとして、また、人類が共通して抱える諸問題の解決に貢献できるリーダーとして成長してほしいものだと考えております。

しかるに、理学部通信は、同窓生皆様さんのご理解とご協力を頂き、順調に回を重ね好評をいただいております。加えて、関東地域に鹿大理学部同窓会支部

が結成され、平成二十一年十一月二十二日に鹿児島大学理学部関東同窓会設立総会が盛大に開催されましたことは洵に有難く、理学部同窓会発展の方向付けと大きな足がかりになったも



理学部関東同窓会設立総会 平成21年11月22日

のと心から感謝申し上げます。ろです。大学からも清原学部長を始め、大木同窓会副会長、内海同窓会幹事にご出席頂き、御来賓として鹿児島大学同窓会連合会関東支部長今村彬様も御臨

席と御挨拶を賜り、その会に花を添えて頂きました。鹿大理学部同窓会関東支部の今後の御活躍と御発展を御祈念申し上げますとともに、関東一円に在住の同窓生の皆様には、支部の活動に積極的に参加下さいませようお願い申し上げます。

次の理学部(本部)同窓会総会は、平成二十二年十一月の予定ですので、できるだけ多くの会員の皆様と元気でおいで出来ますことを楽しみにお待ち申し上げます。また、理学部関東同窓会第一回総会も平成二十二年九月開催を目指して準備が始まった旨、聞き及んでおります。関東在住の同窓の皆様方には、連絡を取り合って第一回総会をおおいに盛り上げていただきたいと思います。

最後に「理学部通信」の発行にご尽力頂いた理学部通信編集委員会の先生方、各学年より選出された学生の編集委員の皆様には心よりお礼申し上げます。会長の挨拶とさせていただきます。

理学部通信第4号 目次

同窓会会長挨拶 川畑 隆……………1	数理情報科学科……………4
理学部はいま 清原貞夫……………2	物理科学科……………5
理学部ニュース……………2	生命化学科……………5
今世紀最大の皆既日食	地球環境科学科……………6
日食観測船「かごしま丸」乗船記……2	卒業生だより……………6
インテンシブ理数教育	退職教員からのメッセージ……………7
特別プログラムによるマレーシア研修…4	人事異動・学生表彰者……………8

理学部はいま

理学部長 清原 貞夫



二〇一〇年を迎え、全国の理学部同窓会の皆様には益々ご壮健にご活躍のこととお慶び申し上げます。理学部通信四号の発行に当り、ご挨拶と理学部の近況を報告させていただきます。

二〇〇九年は鹿児島大学創立六十周年の節目の年であり、理学部の前身である文学部発足からも六十年目であります。昨年十一月二十四日には六十周年記念式典と記念シンポジウムが開催され、また記念事業の一環として中央図書館一階に「鹿児島大学歴史展示室」がオープンされました。吉田学長は記念式典の中で、「鹿児島大学は地理的特性と教育伝統を踏まえ、学問の自由と多様性を堅持しつつ、自主自立と進取の精神を尊重し、地域と共に社会の発展に貢献する総合大学をめざす」と述

べられました。この全学的目標に向けては、自然科学の中で特に基礎的な領域の教育と研究を担っている理学部の使命は大変重要であると認識しています。理学部教員は、純粋科学として知的興味を探求と、社会的課題への貢献の二つを柱として、各々の研究に専念し最新の成果を教育に活用すべく日々努力をしています。

さて、次に理学部の教育の新しい取り組みを紹介いたします。それは、平成二十一年度科学技術振興機構（JST）が公募した新規事業「理数系教員のコア・サイエンス・ティーチャー（CST）養成拠点構築事業」に採用されたことでもあります。本理学部は、「通常取組」部門に応募し、二十四件中五件採用の中に入りました。CST養成スクールでは大学院生および小・中学校現職教員を対象に、科学する楽しさを児童・生徒に伝えることができる人材、CSTの養成を目指します。養成スクールでは、大学院理工学研究科、農学研究科、水産学研究科、教育学研究科のほか、鹿児島県教育委員会、鹿児島県総合教育センターおよび鹿児島市教育委員会の

協力を得て、各機関の特徴を活かしたプログラムを提供します。二〇〇九年度はカリキュラムの開発・整備を行い、二〇一〇年四月より授業を開始し年間十名程の受講者を受け入れます。

理学部ニュース

今世紀最大の皆既日食

日食観測船「かごしま丸」乗船記



かごしま丸

二〇〇九年七月二十一日午前、日本では四十六年ぶりとなる皆既日食が観察されました。今回の皆

最後になりましたが、同窓会の皆様、今後も母校の理学部が良き人材の育成と知の創造的な拠点として活躍し続けるため、引き続き暖かいご支援とご理解をたまわりますようお願い申し上げます。

既日食は皆既の継続時間が最長で約六分四〇秒と今世紀最大の長さとなるものでした。県内の離島を皆既帯中心とするため、鹿児島大学理学部では水産学部と連携して水産学部の練習船「かごしま丸」を出して観測を行う計画がもちあがりました。自由に動ける船の強みを生かし、洋上の晴れた場所を探して皆既日食の科学観測を行うこのような計画は国内では初めての試みでした。

ける総物質質量分布の探索、

- 奥田名誉教授（宇宙科学研究所）、向井名誉教授（神戸大）、大朝准教授（埼玉大）らによる太陽のまわりに存在すると考えられているダストリングの赤外線観測による検証、
- 土佐台長（仙台市天文台）らによるハイビジョンカメラによる太陽コロナの撮影、
- 仁科助教（鹿児島大）らによる皆既日食中に吹くと言われていた伝説の風「日食風」の解明、
- 佐野准教授（近畿大）らによる地球大気粒子による日食観測への影響の推測の6テーマです。

それぞれの科学目的の下にチームが結成され、チームには県内の高校生も参加しました。研究者や大学生が行うフィールドワークの現場を体験し、科学への興味を深めてもらうことを目的に、天文や海洋に興味のある鹿児島県内の高

3つの観測候補地点

在校生を事前に募集し、五名の高校生に洋上観測に参加してもらいました。

七月二十日の海の日、かごしま丸は谷山港を出発しました。出港後、予め検討された三つの観測候補地点（東経一二六度・北緯三〇度のおよそ九州と中国の中間地点、東経一三一度・緯度二九度のおよそ種子島と奄美大島の中間地点、東経一三五度・北緯二八度のおよそ奄美大島と小笠原諸島の中間地点）から観測地点を一つに絞るための会議が、各観測チームの代表者らによって行われました。残念なことによりこの日、日本列島はすつぽりと雲に覆われ、どこにいても曇り空という状況でした。ただ、ここで諦めるわけにはいきません。少しでも皆既日食を観測できる確率が高い場所を目指し、太平洋高気圧がある東経一三五度・北緯二八度（およそ奄美大島と小笠原諸島の中間地点）に向かうことになりました。初日は避難訓練、自己紹介にあてられ、残りの時間は船の揺れに慣れるための自由時間でした。船上から見える桜島や開聞岳が観測隊をあたたく見送ってくれ、また夜の天の川は日食観測を応援してくれているようでとても印象的でした。二日目はまず生存確認から始まり、次いでラジオ体操、観測リハーサル、水産学部の実習、観



理学部の学生による電波観測

測地点決定のための最終ミーティングが行われました。三日目はいよいよ皆既日食当日です。日食は午前中です。この日の朝は生存確認だけが行われ、各観測チームはさつそく観測の準備にとりかかっていました。しかし、船は四方を雲に囲まれ、ときにはスコールまで降るような状況です。いよいよ部分日食がはじまるという時にスコールにおそわれ、観測機器をブルーシートで雨から守る場面がありました。しかし、しばらく経つと晴れ間が見え始め、日食メガネで太陽が欠けていく様子も確認でき、船上の多くの人たちから「お〜」という感嘆の声が聞こえてきました。皆既に近づくにつれて空がだんだんと暗くなり、少しずつ涼しくなっていました。ここで、皆既直前に気温が下がったせいか、雲がどんでんできて太陽をきれいに隠してしまいまし

た。それでも、水平線に沿って四方の空が夕暮れ時のように赤くなり、昼間に金星も見ることができ、神秘的な雰囲気を感じることができ、とても感動しました。夜には地元のテレビ局MBCの番組「どーんと鹿児島」で、船上から中継で理学部の学生が皆既日食観測の様子などについて報告していました。観測も終わった四日目、船は帰港の途に就き谷山港を目指します。船内では観測結果の

速報を聞くことができました。どの観測チームも部分日食の時間帯のデータや写真はとれていました。が、残念ながら皆既の時間帯は太陽を覆う厚い雲のおかげで有効なデータの取得ができずに終わってしまったようです。最終日の五日目は全員でお世話になったかごしま丸をきれいにし谷山港に帰港しました。再び見える桜島や開聞岳が、今度はお帰りなさいとあたたかく我々を迎え入れてくれました。最

後にこのような貴重なイベントを体験できる機会を与えてくださった祖父江特任教授（鹿児島大）、また、私たちが安全な航海に導いて下さった東船長、仁科助教（鹿児島大）をはじめとするかごしま丸のスタッフの皆様、今回の日食観測にかかわった全ての皆様に感謝しつつ、このレポートを終わることにします。

（生命物質システム専攻

二年 松井 真



部分日食



日食観測の結果報告会の様子



皆既日食中の空の様子

インテンシブ理数教育 特別プログラムによる マレーシア研修

インテンシブ理数教育特別プログラムとは、国際的に活躍する研究者や、指導力に優れた理数系教員の育成を目指し、より高度な理数系教育による優れた人材育成を実施するものです。このプログラムは、文部科学省の「理数学生応援プロジェクト」事業として全国の大学のさまざまな取り組みの中から選ばれました。今年、インテンシブプログラムの一環として、八月十日(月)から八月十六日(日)の七日間、マレーシアのボルネオ島北部、キナバル山の山麓で海外研修が実施されました。

研修の中心となったキナバル山は、北緯〇六度〇四分五九秒、東経一一六度三二分五九秒に位置し、標高は四、〇九五・二mと東南アジアの最高峰です。周辺のキナバル自然公園は、気候区分では熱帯雨林気候に区分されていますが、土壌の性質(蛇紋岩と花崗岩)やキナバル山の垂直的な温度の変化が作用しているせいで、さまざまな森林群系を観察できます。東南アジア多雨林地帯の食虫植物といえ、人目をひく点でウツボカズラ類(Nepenthes)が最も有名ですが、今回の実習でも多くのウツボカズラを発見しました。日本の照



葉樹林で見かける植物の形態とは異なった植物がいくつも目に付いたキナバル自然公園内でしたが、とりわけこのウツボカズラの仲間が印象的でした。また、野外での観察に加えて、サバ大学では貴重な昆虫や植物の標本庫を見学させて頂きました。大学では、学芸員の方に案内してもらい、現地の珍しい標本についていろいろと教えて頂きました。専門的な内容まではなかなか聞くことができませんでしたが、興味のあることは積極的に英語で聞くことができました。今回のマレーシア研修において熱帯多雨林の植生や生態を学び、そこには土壌や気候、歴史的背景など多くが影響していることを知りました。植物・動物・地質など学問上は一見違う分野のものが、実は密接にかかわっていることを、身をもって体感できました。私たちの身近にはない熱帯多雨林の真の姿を知ることができたことは、今後の研究活動に大きく生かしていけると思います。

(地球環境学科 三年 西澤文勝、坂本輝美、石津優佳)

数理情報科学科

合宿研修

数理情報科学科二年四十三名は十月二十二日、二十三日にかけて一泊二日の合宿研修に霧島まで行きました。研修中にまず初めに行ったことは、「数学について自分が興味を持っている定理や事象」や「数学について自分が困っていること」などのテーマについて各々の意見を発表するプレゼンテーションでした。各々が数学でどのようなことに苦勞をし、どの

ようなことに興味を持っているのかが分かり楽しかったです。また、その次にいくつかのグループに分かれて学生と先生が混じり体を動かして汗を流した自由交歓や、一緒に鍋を囲んだ夕食では、より一層学生同士や先生との親睦を深め、日ごろの学校生活とは違った会話をすることができました。

次の日は、えびの高原にて池巡りを行いました。えびの高原は木々が色鮮やかに紅葉をしており、秋の景色を堪能することができました。



この二日間は私たち数理科二年の仲をより一層深め、また、先生方との日ごろできない交流をする大変いい機会となり、四年間の大学生生活の中の新たな思い出となりました。
(数理情報科学科二年 西脇 彬)

理学部祭

■室内■

数学の楽しさを体感してもらうためにパズルや数学などさまざまなコーナーを理学部二号館の二二二号室で行いました。

パズルのコーナーでは、いろいろな図形を組み合わせてT字や正方形を作るパズルを設置しました。このパズルは学生が自ら板を切り、色を塗って作りました。

などなどのコーナーでは、ホワイトボードに数学パズルをいくつか出題しました。この問題も学生



がオリジナルで作成しました。どちらのコーナーもそれほど難易度は高くはなく取り組みやすい内容であったので、この会場はたくさんの子供たちで賑わっていました。それぞれのコーナーには学生がサポートにつき、子供たちへの対応は教育実習を終えた四年生が中心になって行いました。子供た

■野外■

射的では牛串と射的を出店しました。牛串は毎年とても人気があり、たくさんの方が訪れます。今年もみごと完売することができました。

射的では景品にゲームソフトやお菓子が置かれ、多くの子供たちが楽しんでいました。

(数理情報科学科四年 小荒田倫人)

ちが問題に真剣に取り組み姿がとても印象的でした。

数理情報四年の桑原君は「このような出し物とおして、少しでも数学に興味を持ってもらえればうれしい」と語っていました。

物理科学科

種子島実習レポート

十月三十・三十一日物理科学科三年生二十一名が授業（天体観測実習）の一環として一泊二日の種子島研修旅行に行ってきました。当日は素晴らしい天候に恵まれ、全日程無事に終えることができました。



種子島宇宙センター内 実物のロケット展示

「地球という惑星を種子島でみる」というテーマのもと、プレート境界特有の海底堆積物であるタービタイト、波の浸食によりできた海蝕洞（千座の岩屋）など種子島の特徴的な地形を根建先生の詳しい解説を聞きながら見る事ができました。今回の実習のメインであったJAXA種子島宇宙センターの見学では、まず講義で施設の役割を簡単に理解したあと、職員の方の案内で普段一般の見学では立ち入ることのできないエン

ジンの燃焼試験場や実物のロケット展示を間近で見ることができ、

多くの学生が熱心に質問していました。

鉄砲伝来の島として歴史的にも重要な種子島。資料館では鉄砲伝来の経緯や国産初の火縄銃、島民の暮らしぶりなど島の文化にも触れることができました。



干潮時の千座（ちくら）の岩屋

今回の実習は計画の立案、準備、当日の指揮まで学生が主体となつて行われました。共同部屋での宿泊、食事も自炊であったため学生同士の絆はより深まったように感じます。一日目の夜に行われた懇親会ではメキシコからの研究員の参加もあり、英語で自己紹介することになりました。いつも使わない英語に困惑しながらもそれぞれが考え自分の意見を述べました。島の自然を肌で感じ（自転車道で島内を回った人もいました）普段の生活の中では得られない皆さんのことを学生それぞれが五感でしっかりと感じ取ることができ、非常に有意義な実習となりました。

（物理科学科 三年 櫻田大悟）

生命化学科

インテンスィブ理数教育特別プログラム

理学部では理数分野に強い学習意欲を持つ新入生を対象に、通常の教育課程に加えて特別の教育プログラムを行っています。今回これに参加した生命化学科二年・玉置理那さんにインタビューを行いました。

「私はインテンスィブ理数教育を受けて心からよかったですと思っています。それは、サイエンスクラブ

の実験で授業で習ったことをすぐに体験することができたからです。体験するということは、机上で学んだことよりもとても印象に残り、どうして？なぜ？と疑問を持つことでより深く勉強して知識を得たいという知識欲が生まれま

した。この知識欲がこれからの勉強にもつながっていくかと思っています。また、さまざまな大学の教授から講義を受けたことは、今まで持っていなかった知識や物の見方を増やすきっかけになりました。

愛するための「誘引物質（フェロモン）」というように、その生物が厳しい環境の中で生き残るための術として使われていることが分かってきました。このような物質の中には、薬草のように私たちにとって有用なものがたくさん含まれており、医薬品のターゲットとして、研究・開発が続けられています。

研究室紹介（濱田研究室）

私たちの研究室では、「生物由来の有機化合物」について、新たな生理活性物質を探索し、化学構造を決定し、また、生理活性のより詳細なメカニズムの解明を行っています。

陸上及び海中に生息する生物は、数多くの有機化合物を作り出しています。それら有機化合物は、外敵から身を守るための「防御（毒性）物質」・他の植物の生長を妨げる「発芽抑制物質」・オスに求

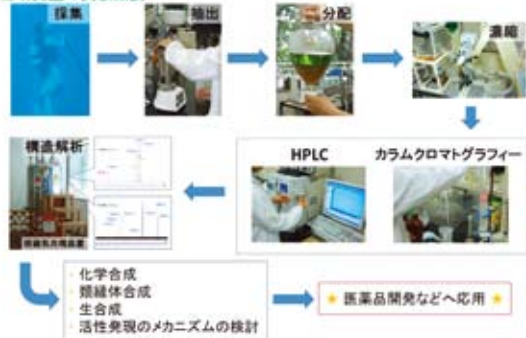
これらの興味深い有機化合物から、最終的に抗がん剤などの医薬品の基となる化合物を単離していきたいと考えています。

（生命化学専攻一年 山下雅史）

私の憧れている教授の話や機会を得ることができたのも、このインテンスィブのおかげでした。他方面の話や刺激になりました。」

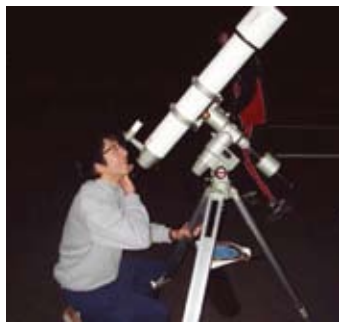


■当研究室の実験概要



地球環境科学科

地質科学講座 尾上研究室



月のクレーターを観察する実習

尾上研究室では、野外調査から得た地質の情報をもとにして、過去の地球で起きた様々なイベントや地球環境の復元を目指しています。主な研究対象は、西南日本やカナダ・アメリカ西海岸、フィリピンなどに分布する三疊紀〜ジュラ紀(約二・五億年〜一・五億年前)の付加体と呼ばれる地質体です。これまで、生物大量絶滅後の海洋環境の回復過程や進化の解明に取り組んできました。最近では、付加体の岩石中に含まれる「宇宙塵」と呼ばれる宇宙起源の粒子から、太陽系の歴史について研究を進めているそうです。

尾上研究室四年生の佐藤峰南さんにインタビューしました。「現

在は、約一億〜二億年前に起きた天体衝突によって生じた物質を地層中から取り出し研究を行っています。研究対象は、付加体中に含まれる岩石です。地層には地球や生命の歴史だけでなく宇宙の歴史についても記録されており、それを読み解いていく作業はとておもしろいです!」

(地球環境科学専攻一年 原之園岳志)

多様性生物学講座 山根研究室

当講座の博士後期課程一年の前田拓哉さんに、山根研究室でどのような研究をしているのかインタビューをしました。彼の研究内容は、日本産ハマハシリバエ属の分類的研究で、アリの研究されている山根先生と分類群は違うが、先生からは分類学を教わっているそうです。彼がハマハシリバエ属に興味を持ったのは、学部四年生の時。卒論の調査で吹上浜に行った時に、翅が短くて飛べないハエを見つけたことが出会いだったそうです。博士前期課程の時には、原付五〇ccで日本中の浜へハマハシリバエの生息調査に行ったそうです。

す。この調査は、日本に何種のハマハシリバエ属がいるのか、また、それらの分布を明らかにすることが目的で、この調査によって、新種のハマハシリバエを数種見つけたそうです。現在は調査で得られた標本をもとに、論文を作成中。また、日本だけでなく台湾、タイなど海外にもフィールドを広げています。

(地球環境科学科二年 御手洗麻衣)

卒業生だより

やすだちか
安田知佳さん

地球環境科学専攻
平成二十年年度修了
国際石油開発帝石株式会社



ハマハシリバエ属の一種

Q1. なぜ現在の仕事に就かれたのですか?

A. 一言で言うと、学生の時に面白いと感じた「地球科学」分野の延長に今の仕事があったということです。わたしは大学で地質学の研究をしていましたが、この分野の職種としては、地質コンサルタント、金属、セメント、石油会社

などがあります。そのなかでも石油業界は、女性にも活躍の場が開かれていて、さらに世界中で仕事ができるのではないかと思います。ですが、実際に石油業界を意識し始めたのは修士一年の七月〜九月くらいで、それまではいろんな職種を考えていましたけどね(笑)。

Q2. 理学部で学んだことで、現在の仕事に役に立っていることは何ですか?

A. 一番は、卒業論文や修士論文を通じて論文の書き方を学んだことでしょうか。仕事の現場では、報告書の作成が大きなウエイトをしめるのですが、文章を作成するうえで、卒論や修論で鍛えて頂いた「文章の記載力」がとても役に立っています。それと、地球環境科学科に入ってから思ったことは、実際の自然現象に接する

機会が多かったことです。石油の探鉱・掘削も自然を相手とした仕事ですので、どれだけ様々な地質現象をみたくという経験がとても重要になってきます。そういった意味でも、実際に自然現象に触れる機会が多かった地球環境科学科での六年間は役に立ったと思います。

Q3. 理学部の先輩たちにメッセージをお願いします。

A. みなさん自身の人生、みなさんが好きなことをして下さい。理学部という所に来て、やりたかったことがやれている人も、自分には向いてないかも...と思った人もいると思います。その経験を踏まえて、卒業後、自分が何をして食べていきたいのか考えてみて下さい。わたしの場合は、たまたま地質学が面白いと思って石油業界で働くことにしただけです(笑)。

みなさんがそれぞれ持つ思い、能力に制限をかけることなく、自由に社会に羽ばたけることを願っています。

ちくちん みつこ
築地新 光子さん

生物学科 平成七年度卒
いおワールドがごしま水族館

Q1. このお仕事で大変だということは何ですか?

A. 一般の方に、質問を受けた時、回答をわかりやすく、間違いがないようにするのが大変です。相手がだれだかわからないと、後で間違

いに気づいても訂正できないので、慎重に答えなければなりません。

Q2. 一日の仕事時間の内、飼育担当の生物と関わる時間はどれくらいですか？

A. とても難しいのですが、1〜2時間です。担当以外の生物も世話をしなければいけませんし、デスクワークもかなりあります。

Q3. 他の仕事にはないこのお仕事の魅力があれば教えてください。

A. いろいろな生きものに会えるということ。また、それを人に伝える機会があるということです。

Q4. 展示等を企画するうえで重視していることは何ですか？

A. お客様の目線で興味を持てるようなことを企画するということが、しかし媚びることなく(生きものを過度に擬人化することなく)、正しく情報を提供すること。たかさんの人が見るものなので、いろいろな受け取り方があると予想されますが、誤解をまねくようなものは避けるということです。

Q5. 培養する餌生物にはどのようなものがあり、どのようなことに気をつけておられますか？

A. クラゲ類や稚魚の餌となるアルテミア、孵化したての稚魚の餌となるワムシなどがあります。稚魚は特に餌切れが致命的になる場

合がありますので、餌の供給が途切れないよう注意しています。管理がおろそかになると餌が混じってしまったり、全滅することもありますので衛生面には特に注意しています。

新谷 元信さん

物理科学専攻
平成十八年度修了
東芝メディカルシステムズ株式会社



卒業してから三年が過ぎようとしていて、少しは社会人らしくなったのではないかと思っております。私の仕事は医療機器であるCT(人体の断面のX線撮像装置)のサービスマンです。海外のフィールドエンジニアとコンタクトをとり、CTシステムの修理やメンテナンスをサポートします。他にも海外顧客へのサービスマンにも取り組んでいます。

大学では電波望遠鏡を用いてAGB星(星の一生で最期の段階にさしかかった星)の研究をしていました。今では、大学で学んだこととは直接関係のない仕事をしておりませんが、大学時代の経験は仕事に通用する部分がたくさんある

と感じております。研究室で毎日試行錯誤しながらこつこつ取り組んだ研究のプロセスは会社で何かを作りあげるときにの基盤となっており、何を勉強したかではなくどのようなプロセスで勉強してきたかが大切なのではないかと思っています。

仕事はつらいこともたくさんありますが、やりがいがあり楽しいです。今、こうして色々な国の方とお会いしたり、出張する中で自分の無知さと世界の広さを感じさせられます。今の課題はコミュニケーションです。自分のオフィス内でのコミュニケーションでも難しく感じる私にとって、言語、文化、宗教、時差など大きな違いがある方とのコミュニケーションは大きな壁です。このような環境でのコミュニケーションが必要であるのは最終的には人間としてのハートと自分の技術力だと感じます。今後の課題は山のようにあり、腕が鳴ります。

酒井 恒治さん

数理情報科学専攻
平成十七年度修了
日本生命保険相互会社



【会社について】
私は大学院修了後、日本生命に就職しました。入社後は北九州の支社に配属、三年間フロント業務を経験し、現在はバック業務として丸の内本部部署に異動となり今年で四年目となります。金融機関ということもあり、文系色が強い会社ではありますが、現在では理系人材への間口も広く、活躍できると感じています。

【学生時代について】

学部三年までは、正直、単位を取ることだけが頭にありました。が、学部四年・修士のゼミからは『大学の数学も考えれば理解できるもの』ということと、『大学の先生は質問をすると、丁寧に教えてくれる(笑)』ことにやっとなりついて、それからのチョークをもって黒板と睨めっこする日々は楽しいものでした。また、他学部の学生と組んで、ベンチャービジネスプランコンテストに応募したり、各学年に数理委員という役割を作った縦の連携を出来るようにしたり、サークルを三つ掛けもちしたりと何かと忙しい日々でしたが、色んな所で出来た絆は私の財産となっています。

【今の学生に対して】

大学は、高校までとは違い、自分から学ばなければ得るものは少ないのではないかと思います。大学での講義や研究はもちろん、サークルやバイト、留学やWS

クール、飲み会や合コンなど様々な場面での出会いを大切に、自分の成長に繋がられる様、何にでも挑戦して下さい。

退職教員
からの
メッセージ

根建 心具 先生



「教養部改組を思い出して」
以前、米国が実用化能力の高い日本に、基礎科学への投資を要請したことがあった。企業内研究が飛躍する中で、実学系学部は定性的には基礎科学へシフトし、理学部は純粋自然現象を学際的に探求するか、実学と連携して成果を挙げるか、模索を続けたと思う。教養部改組の頃は前者の考えがやや強く、地学科から物理科学科へ移った私は学問の壁を越えて様々な支援を受け、新しい理学を楽しめたと思う。皆様に感謝し今後の発展をお祈りする。

やまもと まさひこ
山本 温彦 先生



昭和四十四年卒理学部一回生の定年第一号です。その後、四十年以上にわたり、地学科岩石及び鉱物学講座と地球環境科学科環境解析講座に勤務しました。その間、野外科学一筋に、鉱物学、岩石学、地球化学分野の教育と研究に携わることができました。とくに、野外調査では、多くの教職員や学生の方々と接することができ、楽しかったこと思い出されます。今後、伝統と情熱と英知を活かして、理学部が発展することを願っています。

人事異動

(平成二十一年度)

(1) 新任教員

- 数理情報科学科 現象数理講座 千原 浩之 教授
- 物理科学科 固体物理講座 小山 佳一 教授
- 物理科学科 宇宙情報講座 和田 桂一 教授

(2) 退職教員

- 地球環境科学科 環境解析講座 神崎 亮 准教授
- 物理科学科 宇宙情報講座 根建 心具 教授
- 地球環境科学科 環境解析講座 山本 温彦 准教授

学生表彰者

(平成二十一年度)

稲盛賞受賞者

- 平峰 祐一(物理科学科)
 - 益田真都香(生命化学科)
- 稲盛賞は、平成十五年度から京セラの名誉会長稲盛和夫氏の寄付金により運営されています。

理学部賞受賞者

- 坂元 孝之(数理情報科学科)
 - 上板屋亮介(地球環境科学科)
- 理学部賞は、平成十九年度から理学部教員の寄付金を基に、優秀な成績を収めた学生やボランティア活動など顕著な社会貢献を果たした学生に、理学部と同窓会が合同で表彰する制度として制定されました。

編集委員

(学年は平成22年3月現在)

数理情報科学科

- 教員(委員長) 西田 詩
- 二年 西脇 彬
- 四年 小荒田倫人

物理科学科

- 教員 中川亜紀治
- 三年 櫻田 大悟
- D二 松井 真

生命化学科

- 教員 九町 健一
- 二年 岩崎 成美
- M一 谷村陽一郎

地球環境科学科

- 教員 尾上 哲治
- 二年 御手洗麻衣
- 三年 西澤 文勝
- 坂本 輝美
- 石津 優佳
- 原之園岳志

- M一 内海 俊樹

同窓会担当

- 教員 徳田 琢

事務担当

- 総務係 徳田 琢

理学部通信発行協力金のお礼とお願い

第三号で「理学部通信発行協力金」をお願いしたところ、三百二十名の方々から総額七十四万一千円(一月三十一日現在)のご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。お寄せいただいた協力金は、理学部通信発行など同窓会発展のために大切にに使わせていただきますので、今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

理学部同窓会会長
理 学 部 長

編集後記

鹿児島大学理学部通信第四号の発行にあたりまして、お忙しいなか原稿をお寄せ下さいました執筆者の皆様、編集に原稿作成にご協力下さいました学生編集委員の皆様、何らかの形でご協力下さいました全ての皆様、ありがとうございます。 (編集委員長)

鹿児島大学理学部

〒890-0065 / 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目21番35号
TEL : 099-285-8015,8025 / FAX : 099-285-8029
<http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/>

鹿児島大学理学部同窓会

〒890-0065 / 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目21番35号
TEL・FAX : 099-285-8164
<http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/~dosokai/dosokai/index.htm>